

センチメンタル

川野夏明

日常生活していると、時たまひどく感傷的になることがある。会社で怒られた時など、その最たる例だろう。

こんな日は居酒屋で浴びるほど飲むのが習慣だ。習慣になるほど定期的に干渉に浸る自分もどうかと思うが。

自分ってこんなに打たれ弱かったのか。

会社で失敗して落ち込むたびに、いつもその考えに流れ着く。今までもそこそこ失敗してきた人生だったが、どうやら社会はこれまでの場所とは少し違うらしい。

いや、頭では理解してたんだけどなあ。

そんな無益なことを考えながら夜の歩道を歩いていると、ふとコンビニから声が聞こえてきた。髪をカラフルに染め、見るだけで騒がしいティーンズだち。だが、その顔は誰もが笑っている。その姿を見たとき、この胸にこみ上げてきたのは羨望だった。

別にあんな格好をしたいわけじゃない。久しく笑ってない自分に気づかされただけだ。

見たくないものから目をそらすようにふらふらと夜の町並みを歩いていく。車道を走る車のライトがまぶしくて、思わず目をそらす。

そのとき目に入った店で、ふとその文字を発見した。

『センチメンタル始めました』

「は？」

思わず声が出た。

今夜はただ呼吸をし、店主に注文を頼み、酒を流し込む。

それだけしか役割を持っていなかったのが別の仕事を手に入れた。

いや、だってセンチメンタルだぞセンチメンタル。あれ、

センチメンタルってあのセンチメンタルだよな？ それはどうして冷やし中華のノリで張り出されているんだ？

そんな疑問に引き寄せられるように、俺はその店へと入っていった。

中はいたって普通の立ち食いそばといった体だった。ただ、人気がないのか一人も客の姿が見えなかった。店のカウンターの奥では、イスに座った店主が暇そうに野球の中继を眺めている。と、俺が入ってきたことに気づいたのか

こちらに感情のない目を向けてきた。

「……らっしやい」

それだけ行つて、彼は昔懐かしいブラウン管に視線を戻す。何だ、この店は。いぶかしみながらもメニューを手に取りると、やはりというかなんというか、そこにはかけそばやきつねそばに混じつて『センチメンタル』の文字があった。パソコンで出漁された文字ではなく、明らかに手書きの文字がぺたつとメニューの余白に貼り付けられている。ちなみに二百歩十円らしい。安い

「センチメンタルひとつ」

「……あいよ」

注文すれば、重い腰を上げて調理を始めるこの男。

先ほどのだるそうな様子とは違い、その行動はやけにきびきびしているように見えた、

数分後、センチメンタルなるメニューが目の前に運ばれてきた。

マグカップ二つ分の高さがある大きさの樽は、見かけ倒しなんかではなく触ってみればしっかり木の感触がした。

樽の中には数センチに着られた……きしめんだらうか？

それがだしにどっぷりとつかっている。

……あれか、短い麺が樽に浸かっているからセンチメンタル、ということだろうか。

その脇に添えられているのは真っ赤なレンゲ。どうやらこれで食え、ということらしい。

「えっと、これは？」

「センチメンタルです」

「本当に？」

「センチメンタルです」

「マジすか」

「センチメンタルです」

店主、謎のセンチメンタル押し。

「……ぷっ」

俺は笑った。なんだか考えるのがばからしくなつて。

急に笑い出した俺に驚いたのか、店主が目丸くしてこちらを見ているのが分かった。

が、それでも俺の笑いは止まらない。何が面白いの自分でも分からないが、とにかく収まらなかった。

「ありがとうございます。久しぶりに笑った気がします」

「そうかい」

俺の感謝に戸惑ったような声で店主は応える。しかし、そんなことは気にならなかった。レンゲをつかんで麺をすくい、口に運ぶ。

まず感じたのはふわりとだしの香りだった。口に含めば、鯉節と昆布、いりこの合わせだしが麺と絡まり、うどんやそうめんとは違うきしめん独特の食感を感じる。

青ネギの存在がつるりとした麺にアクセントを与え、口を動かせば小さな辛味が舌を刺激する。

それを楽しみながら食べていたら、樽の中はいつの間にかすっからかんになっていた。

あっさりと食べ終わったことに名残惜しさを感じながらも、俺はレジで二百五十円を払って扉に手をかける。

と、その時カウンターの奥からあの渋い声が聞こえてきた。

「またしようもないメニューぐらいなら考えておくよ」  
ハッと後ろを振り返る。

店主は暇そうにチャンネルを回しているだけだ。

それでも俺は頭を下げた。

「ありがとうございます。また来ます」

それから、俺はよくあの店に通うようになった。

ちなみに最初のあの時は本来営業時間ではなく、家でチャンネル争奪戦に負けたために店のテレビで見ていただけだったと教えてもらったのはまた別の話。